

W.ユージン・スミスと ニューヨーク ロフトの時代

W. Eugene Smith and New York: The Loft Era

インタビュー

2F 2026.3.17(火) → 6.7(日)



にすばらしいもので、東京都写真美術館にその多くが収蔵されているのはとても嬉しいです。今回、展示されるのもとても楽しみです。

ユージン・スミスはどのような人物だったのでしょうか。

彼は生活と写真が完全に一つになっていました。食べながら寝ながら写真を撮る、みたいな感じです。彼が〈スペインの村〉のネガを焦りながら探していたことがあって、やっと見つけた箱の中にはネガと一緒に入れ歯が入っていました(笑)。

〈水俣〉も「ユージンとどんな相談をしながら撮影をプランニングしたんですか?」と聞かれることがあります。そういう話はしたことがないんですよ。撮ることが普通のこと、日常だったんです。

あと、ユージンについて知ってほしいのは彼のユーモアですね。作品からは想像できないかもしれませんが、朝から晩まで冗談を飛ばしている人でした。自分のことを「カンザスの田舎っぺだ(corny as Kansas)」ってよく言っていました。カンザスってトウモロコシ畑がたくさんあって、ダサイことをcorny(トウモロコシ[corn]っぽい)って言うんですよ。ニューヨークに行っても、ずっとその感じがありました。

ユージン・スミスはロフト時代を経て〈水俣〉に挑むわけですが、アーティストとしてなのか、ジャーナリストとしてなのか。どのような意識で取り組まれたのでしょうか。

彼がよく言っていたのが「お前はアーティストなのか、ジャーナリストなのか?」って聞かれるけれど、自分がやっているのはアートかジャー

ナリズムかの二択ではなく、一つのものだ」ということでした。彼が一番大事にしていた言葉は「客観なんてない。主観しかない」。主観だからこそ、写真家は誠実に公平であろうとしなくてはならない。そして自分の写真家としての責任は被写体と写真を見る側の二者に対してなのだ。彼にとって、本当に心に響くジャーナリズムはアートだったんです。彼のジャーナリズムに対する信念を果すためには、アートでなければならなかった。

ユージンが水俣を撮ろうと決意したのはロフト時代の最後でした。ロフト時代はユージンの人生で一番長い鬱の時代でもあって、回顧展をやりきったらこの世を去る、と言っていました。私と出会った時も、1枚のリトグラフを見せられたことがあります。骸骨が墓から出てきて、その隣に若い乙女が立っている。「骸骨が俺で、乙女がお前だ」って。ユージンは水俣との出会いによって鬱から抜け出せたんです。

水俣病の患者さんは自分が苦しいだけではなく、幼い子どもが痙攣しながら亡くなっていくのを目の当たりにしたり、夫や妻が寝たきりに



4

W.ユージン・スミスとニューヨーク ロフトの時代

W. Eugene Smith and New York:
The Loft Era

2F 2026.3.17(火) → 6.7(日)

【観覧料】一般700円ほか 各種割引あり
【主催】東京都、東京都写真美術館 | 後援 | J-WAVE 81.3FM

関連イベントは当館ウェブサイトをご覧ください

平和への祈りを象徴する《楽園への歩み》、たった一人で村の医療を担う医師に密着した〈カントリー・ドクター〉、そして水俣病に苦しむ人々とその闘いを世界に知らしめた〈水俣〉など、数多くの名作を世に送り出したW.ユージン・スミス。彼とともに水俣取材し、いまもアイリーン・アーカイブでユージン・スミスの作品を世に送り出しているアイリーン・美緒子・スミスさんに、ユージン・スミスの人と作品についてお話をうかがいました。

まず、アイリーンさんの現在の活動を教えてください。

ユージンと水俣を撮影してから現在まで、水俣病の問題に関わり続けています。2026年は水俣病が公式に確認されてから70年。水俣病の被害についての網羅的な疫学調査がまだにされていなかったり、救済を求める裁判も続いていて、今も水俣病は終わっていません。もう一つが1991年に設立したグリーン・アクションの活動。原発をやめようという取り組みです。そしてアイリーン・アーカイブの活動。ユージンと私が撮った水俣の写真の次世代に残していくために、モダン・プリントを作ったり、展覧会を企画しています。

今回の展覧会は水俣もちろんですが、ユージン・スミスのロフト時代の作品が多く展示されます。アイリーンさんもこの時代に彼に出会っているんですね。

今回、ロフトの時代を中心に、という切り口がとても面白いですね。ユージンの作家生活は、第二次世界大戦、雑誌『LIFE』の時代、そして最後の〈水俣〉に大きく分けられますが、ニューヨークのマンハッタンにあったロフトを拠点にしていた時代は、『LIFE』と〈水俣〉の間に

なったり、亡くなったりしていました。長い間、大企業に対して泣き寝入りさせられてきた。ユージンと私が水俣に行ったのは、ちょうど水俣の人たちが立ち上がって裁判で闘っていた時でした。内向的だったロフト時代から、もう一度立ち上がろうとしていたユージンと、動き始めた水俣とが出会ったんです。

この展覧会をご覧になる方に期待することはありますか。

写真は見る人によって完成されると私は思っています。昔の写真であっても終わってしまったものではなく、写真は見られるたびに、見ている側の感性とミックスされて完成します。あなたの感性と写真が出合うことで写真がクリエイトされるんです。

ユージンの写真も、偉大な写真家の過去の名作として見ずに、いま見て、あなたの感性とミックスしてほしいですね。写真を見る人もまたクリエイターなんだと私は思っています。

(インタビュー: 東京都写真美術館、編集: タカザワケンジ)

アイリーン・美緒子・スミス

PROFILE

1950年、東京生まれ。1970-71年、写真展「Let Truth Be the Prejudice」の展示制作をユージン・スミスと行う。1975年、ユージンと写真集『MINAMATA』を出版。1994年、アイリーン・アーカイブを設立。2021年、写真集『MINAMATA』(クレヴィス)日本語版を再出版。2022年に設立した「一般社団法人 水俣・写真家の眼」のメンバー。



[1] [2] W. ユージン・スミス〈私の窓から時々見ると...〉より 1957-59年頃 東京都写真美術館蔵 ©2026 The Heirs of W. Eugene Smith
[3] W. ユージン・スミス〈無題(ジミー・スティーンソン)〉(ジャズとフォークのミュージシャンたち)より 1958-65年頃 東京都写真美術館蔵 ©2026 The Heirs of W. Eugene Smith [4] 石川武志〈チツ工場を見下ろすユージン・スミス〉1971年 ©Ishikawa Takeshi [5] W. ユージン・スミス〈無題(認定患者の遺影を持つ親族たち)〉(水俣)より 1972年 東京都写真美術館蔵 ©Aileen Mioko Smith [6] 石川武志(トーストにピーナツバターをつける)1972年 ©Ishikawa Takeshi



3

位置し、自分の内面に向き合っていた頃でした。

暗室にこもってプリントする一方で、ジャズ・ミュージシャンが集まってきて、夜な夜なジャム・セッションをやっていたり、写真家や画家が訪ねてきて、ユージンは彼らの写真も撮っています。ロフト周辺も撮っていて、たとえば私の窓から時々見ると...という作品がそうです。

私がユージンと出会ってロフトに行くようになったのはロフト時代の最後の1年だったので、ジャズ時代の全盛期を知りません。でも、ロフトそのものは変わってなくて、ここでセロニアス・モンクがピアノを弾いていたのか、という残り香のようなものは感じましたね。

私がロフトに行くようになったのはユージンが約600点の写真を展示する回顧展「Let Truth Be the Prejudice」(1971年、ユダヤ美術館、ニューヨーク)を準備している時でした。私を含めた若者たちが集まってきて、展示の準備を手伝っていました。この時のプリントは本当



5



6

ションや交流の様子をスミスは写真に収めました。

この時期の作品は、従来のジャーナリズムの枠を超え、写真の芸術的可能性を探る試みに満ちています。本展では、「ロフトの時代」とその前後の作品を中心に紹介し、報道写真家としてだけでなく芸術家としてのスミスの姿に光をあて、その作品を新たな視点から再考する機会とします。本展が、スミス作品の新たな魅力を発見する場となり、あわせてスミスが目指した報道と芸術の融合に触れていただければ幸いです。



開館時間 10:00-18:00 (木・金は20:00まで) ※入館は閉館30分前まで
休館日 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)

2026

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM NEWS MAGAZINE

SCHEDULE (2026.03 ▶ 2027.03)

TOPコレクション Don't think. Feel. 国

4.2[木]-6.21[日]

AI時代における「感触」をテーマに、五感を触発する作品を選んだセクションや、家族写真の歴史を紹介するセクションなど、短編小説集のように5つの小テーマで構成するオムニバス形式の展覧会



TOPコレクション 明日の食卓 国

7.2[木]-9.21[月祝]

「食」にまつわる多様な視点から制作された作品を、収蔵作品を中心に紹介。食卓から広がる記憶や人とのつながり、現在わたしたちが置かれている環境へと連なる問いなどを浮かび上がらせる



日本の新進作家 vol.23 国

9.30[水]-2027.1.17[日]

新進気鋭の作家5名が、実際に存在した記憶や素材をもとにそれぞれのもつコンテクストを汲み、作品を制作するプロセスを探る



恵比寿映像祭 2027

2.5[金]-2.21[日]

東京都写真美術館を中心に、恵比寿の街に展開する映像とアートの国際フェスティバル

コミッション・プロジェクト 3Fのみ 3.22[月振]まで



1F上映 および展覧会の最新情報はこちら▶



W. ユージン・スミスとニューヨーク

ロフトの時代 国 3.17[火]-6.7[日]

20世紀のドキュメンタリー写真を代表するアメリカの写真家、W. ユージン・スミス(1918-1978)の個展



出光真子 国

6.18[木]-9.21[月祝]

実験映画、ビデオアートのパイオニア的存在として知られる出光真子(1940-)。創作活動の全貌を振り返る大規模な回顧展



アジアン・コンテンポラリー 国

9.30[水]-2027.1.17[日]

三影堂・廈門(アモイ)のチーフキュレーター、滕青云(テン・チンユン)氏との共同企画。現在の日本と中国をさまざまな観点から切り取った両国の新進・中堅作家を紹介



恵比寿映像祭 2027

2.5[金]-2.21[日]



北野謙 国

3.6[土]-6.6[日]

宇宙的なスケールで人間の視覚を超えたヴィジョンを表現する写真家・北野謙(1968-)の個展。「光を集める」プロジェクトや長時間露光シリーズに焦点をあてる



養老孟司と小椋山賢二の作品展 国

3.21[土]-5.24[日]

第51回 2026 JPS展 国

5.27[水]-6.5[金]

ソーニャワルドフォトグラフィー

2026展 国 6.20[土]-7.20[月祝]

Nikon Small World / Nikon JOICO AWARD展 国

7.25[土]-8.23[日]

木村伊兵衛写真賞 50周年記念写真展 国

10.31[土]-11.23[月祝]

恵比寿映像祭 2027

2.5[金]-2.21[日]



APAアワード 2027展 国

2.27[土]-3.14[日]

東京都内の美術館・博物館等をお得に見られる「ぐるっとパス」詳細はこちら▶



[1] 田村栄てのひらのヒナ(孵化3日目) <多摩川の鳥>より 1954-60年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵 [2] 原美樹子(発語の周縁)より 2004年 発色現像方式印刷 東京都写真美術館蔵 [3] 河部太郎<あの海に見える岩を、弓で射よ #30> 2022年 インクジェット・プリント [4] W. ユージン・スミス<コールドをはめた鉄鋼労働者>(ピッツバーグ)より 1955年 東京都写真美術館蔵 ©1955, 2026 The Heirs of W. Eugene Smith 企画展 収蔵展 誘致展 年間パスポートの特典は、企画展、収蔵展、誘致展で異なりますので、詳細は公式ウェブサイトをご覧ください。

[5] 出光真子(Still Life)1993-2000年 ミクスト・メディア 東京都写真美術館蔵 [6] 三影堂廈門撮影芸術中心 外観 [7] 北野謙<香川県土庄町 小豆島 千年樹 2017年冬至-2018年夏至>(光を集める)より 2017-18年 インクジェット・プリント 東京都写真美術館蔵 ※5月以降に始まる展覧会名はすべて仮称です。展覧会スケジュールは2026年3月現在の予定です。事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ウェブサイトでご確認ください。

EXHIBITION

3F TOPコレクション Don't think. Feel. TOP Collection: Don't think. Feel.
ものに触れて感じる力
TOPコレクションは東京都写真美術館が収蔵する約39,000点の写真・映像作品をさまざまな切り口で紹介する展覧会です。令和8(2026)年度第一期のテーマは、AI時代における「感触」。「感触」とは狭い意味での触覚だけではなく、「ものに触れて感じる力」を指します。現代では人工知能(AI)の急速な社会進出によって、これまで人間に特有のものとしてきたさまざまな技術や能力の優位性が揺らいでいます。こうした時代背景においてこそ、真の人間性について考えることに意義があるはず。本展では、当館の収蔵作品を通して、「感じる力」の可能性をさぐります。
[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
[主催] 東京都、東京都写真美術館

NEWS

ワンコイン OneCoin映画館がスタート! 1F/HALL
4月から、500円(税込)で気軽に映画が楽しめる「OneCoin映画館〜ショートフィルム特選〜」が始まります。ショートフィルム4本を上映。上映時間は約45分です。展覧会鑑賞の合間にぜひお楽しみください。上映日時等の詳細は公式ウェブサイトやSNSでお知らせします。

パブリックプログラム
暗室で現像を体験できる「モノクロ銀塩プリントワークショップ」や展覧会鑑賞プログラムなど、年間を通じて人気プログラムを多数開催しています。開催予定は、公式ウェブサイトをご覧ください。

フロムトップ 1F/CAFE
お食事セット「やさしいカラーとルーロー飯のあいがけ」。とろとろ皮付き豚バラ肉のルーロー飯と、野菜の旨みが溶け込んだカラーをひと皿で味わえるあいがけです。迷ったときはぜひお試しください。
[営業時間] 10:00-18:00 (木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730 [定休日] 美術館の休館日に準じます

NADIFT BAITEN 2F/SHOP
展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。お気に入りのポストカードや写真を飾って楽しめる新しいスタイルのカレンダー。縦や横、壁掛けなど、お好きなディスプレイで使用できます。プレゼントにもおすすめです。
※写真のポストカードは別売りで

CAZARU カレンダー 1,650円(税込)
[営業時間] 10:00-18:00 (木・金は20:00まで)
[TEL] 03-6447-7684
[定休日] 美術館の休館日に準じます

図書室 4F/LIBRARY
関連図書コーナーでは、開催中の展覧会に関する貴重な書籍や、出品作家の写真集などを特集しています。展覧会をご覧いただいた後は、ぜひ図書室へもお立ち寄りください。
閲覧室にある本は、自由に読むことができます。 [開室時間] 10:00-18:00
書庫にある本をご希望の場合は、検索端末でお調べいただけます。 [休室日] 美術館の休館日、特別整理期間等

支援会員

次の企業・団体のみなさまに東京都写真美術館の活動を支援会員様としてご支援いただいております。

- 特別賛助会員: キヤノン(株)、全日本空輸(株)、(株)ニコン
賛助会員: キヤノンマーケティングジャパン(株)、(株)資生堂、大日本印刷(株)、TOPPANホールディングス(株)、富士フィルム(株)
特別支援会員: アサヒグループホールディングス(株)、サッポロ不動産開発(株)、サッポロホールディングス(株)、東急建設(株)、ピクテ・ジャパン(株)
支援会員: あいおいニッセイ同和損害保険(株)、(株)アイネスト、アイニング(株)、アイネオ(株)、(株)アクト・テクニカルサポート、(株)浅沼商会、(株)朝日工業社
(株)朝日新聞社、(株)朝日新聞出版、朝日生命保険(相)、(株)アフロ、(株)アマナ、(株)岩波書店、(株)潮出版社、(一財)AVCC・霞が関ナレッジスクエア(KK2)、(株)エージーピー、SMBC日興証券(株)、SB C&S(株)、(株)NHKエデュケーショナル、(株)NHKエンタープライズ、(株)NHK出版、(株)NHKテクノロジーズ、ENEOSホールディングス(株)、エルメス財団、OMデジタルソリューションズ(株)、カルツァイス(株)、花王(株)、鹿島建設(株)、カトーレック(株)、(株)KADOKAWA、神奈川新聞社、カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)、(株)企業変革創造、(株)キクチ科学研究所、(株)キタムラ、キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店、ギャラリー小柳、共同印刷(株)、(一社)共同通信社、空港施設(株)、(株)久米設計、グローリー(株)、(株)ケー・アンド・エル、ゲッティイメージズジャパン(株)、興亜硝子(株)、(株)弘亜社、(株)公栄社、(株)廣済堂、(株)講談社、(株)光文社、(株)国書刊行会、(株)コスモインターナショナル、小山登美夫ギャラリー(株)、佐川印刷(株)、三菱オプリー(株)、産経新聞社、サンリーホールディングス(株)、(株)ジェイアール東日本企画、(株)JTБ、(株)シグマ、(株)実業之日本社、信濃毎日新聞社、清水建設(株)、(株)写真弘社、写真の学校/東京写真学園、チャンネル(同)
(株)集英社、シュッピン(株)、(株)小学館、松竹(株)、信越化学工業(株)、(株)新潮社、(株)晋遊舎、(株)スタジオエムジエ、(株)スタジオジブリ、(株)SUBARU、住友生命保険(相)、(株)住友倉庫、(株)生活の友社、セイコーグループ(株)、双日(株)、ソニー(株)、損害保険ジャパン(株)、第一生命保険(株)、台新国際商業銀行、大和証券(株)、(有)タカ・イシギヤラリー、(株)高島屋、(株)竹中工務店、(株)タニタ、(株)タムロン、(株)丹青社、(株)中央公論新社、中外製薬(株)、(株)築地製作所、T&Dフィナンシャル生命保険(株)、(株)TBSテレビ
(株)デサン、(株)テレビ朝日、(株)テレビ東京、(株)電通、東亜建設工業(株)、東映(株)、(株)東京印書館、弁護士法人東京笠井法律総合事務所、東京工科大学/日本工学院、東京工芸大学、東京新聞・中日新聞社、(株)東京スタデオ、東京造形大学、東京総合写真専門学校、(株)東京ダイレクトサービス、東京建物(株)、東京地下鉄(株)、東京テアトル(株)、東京都競馬(株)、(株)東京ニュース通信社、専門学校東京ビジュアルアーツ・アカデミー、(株)東京美術倶楽部、東京メトロポリタンテレビジョン(株)、東京冷機工業(株)、(株)東芝、東宝(株)、(株)東北新社、(株)東洋経済新報社
(株)トータルメディア開発研究所、(株)徳間書店、戸田建設(株)、(株)トロンマネージメント、(株)ニコイメーキングジャパン、日油(株)、日活(株)、日機装(株)、日光ケミカルズ(株)、日本貨物航空(株)、(株)日本デザインセンター、日本ヒューム(株)、(株)ニッポン放送、日本レコードマネジメント(株)、日本空港ビルデング(株)、日本経済新聞社、(株)日本広告写真家協会、日本写真印刷コミュニケーションズ(株)、(公社)日本写真家協会、(公社)日本写真協会、日本写真芸術専門学校、日本生命保険(相)、日本大学芸術学部、日本ロレックス(株)、野村證券(株)、(株)ハーツ、(株)博報堂
(株)博報堂プロダクツ、(株)ハセガワエスティ、パナソニックホールディングス(株)、(株)パラゴンホールディングス、(株)パナダイナミックフィルムワークス、ぴあ(株)、ビー・マックス(株)、北海道写真の町東川町、(株)美術出版社、(株)ビックカメラ、(株)ピラミッドフィルム、(株)ファーストリテイリング、(株)フェドラ、(株)フォーカスシステムズ、(株)富士通パーソナルズ、(株)フジテレビジョン、(株)フジヤカメラ店、芙蓉総合リース(株)、(株)フレームマンプロフォト(株)、(株)文化工房、(株)文藝春秋、北海道新聞社、(株)ホテルオークラ東京、堀江車輛電装(株)、本田技研工業(株)、毎日新聞社、丸善雄松堂(株)、マルミ光機(株)、(株)マンダム
(株)みずほ銀行、三井住友海上火災保険(株)、三井倉庫ホールディングス(株)、三井不動産(株)、三菱製紙(株)、三菱電機(株)、明治安田生命保険(相)、森ビル(株)、ヤマト運輸(株)、(株)吉野工業所、(株)ヨドバシカメラ、読売新聞社、ライオン(株)、ライカカメラジャパン(株)、(株)リビタ、(株)良品計画、(株)ロボット、(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート、(株)ワコール
(令和8年2月現在・五十音順)

東京都写真美術館 TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 [TEL] 03-3280-0099 www.topmuseum.jp



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

東京都写真美術館ニュース「アイズ」124号 □発行日:2026年3月18日 □企画・編集:東京都写真美術館管理課企画広報部 □印刷・製本:株式会社八紘美術 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2026 □本誌掲載の記事、写真の無断複製、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、消費税込みの価格です。事業は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はウェブサイトをご覧ください。